園芸療法活動プログラムにおける発話分析の一考察

小澤直子[1]・本田ともみ[2]・伊勢田直子[3]・澤田みどり[4]・岩崎寛[5]

A Study on Utterance Analysis of Horticulture-based Activity

OZAWA Naoko, HONDA Tomomi, ISEDA Naoko,
SAWADA Midori, IWASAKI Yutaka

Abstract

In recent years, horticulture-based activities designed as therapy for elderly and disabilities people are increasingly being carried out in various locations. In 2015, our university started a student-based practicum by inviting elderly people to participate in gardening activities. The program was planned by student by taking into account seasonality and growth cycles for the plants. The three main activities were flowerbed, crafts, and eating and drinking.

In this research, we analyzed the response of the elderly participants in the student-based activities and examine characteristics of each program.

Regardless of the program, continuing participation in horticultural activities by elderly participants has been to stimulate self-expression, and intergenerational communication with the younger students.

There were various reactions to the different three activities. Many participants responded verbally when physically touching plants during flowerbed activities. Craft activities brought participants a sense of motivation and future expectation, with verbal response including "Let's do it again", "how will this be used when will it be finished". Some of the participants in the eating and drinking activities used their cooking experience to give to the students.

There is a rhythm to horticulture activities ranging from planting and growing, using plants (flowers) for craft activities, and cooking and eating plants (vegetables).

This rhythm was viewed as helping participants revive past memories and develop expectations for the future.

＜目的＞

近年では、高齢者や障がい者などを対象とした園芸を介した福祉的活動が、各地で行われるようになってきている。また、農学系大学や短期大学においても、学生が「園芸療法士」を目指すためのカリキュラムが組まれるようになってきている。

本大学では、園芸療法の通常授業に加え、2015 年度より、大学内に地域在宅高齢者を招き、学生が主体となって園芸活動を継続的に行う、活動実践形式の授業を開始した（写真１）。活動では、「花壇系」「クラフト系」「飲食系」に大別されるプログラムを植物の成長、季節感を出すことで実施している（写真2,3,4）。本研究では、学生主体の活動を紹介するとともに、継続的

写真１　南野キャンパス内園芸療法花壇

写真２　レイズドベッドへの苗植え付けの様子

写真３　さつまいも収穫の様子

写真４　巾着袋への染色プログラムの様子

活動の中で参加高齢者から得られた発話を分析することにより、プログラムの系統による特徴を整理し考察することとした。

＜調査方法＞

調査は、2015 年 9 月から 2016 年 2 月までの授業の間、履修学生が活動参加高齢者の発話記録を取ることにより実施した。履修学生は 15 名で、参加高齢者は 8 名(全回参加 2 名)であった。発話収集データ合計数は 707 で、分析はグラウンデッドセオリー法で行った。

記録は、「花壇系」「クラフト系」「飲食系」とシートを分け各プログラムごとに行った。また発話記録と同時に、量的データとして、参加者と活動中に交わした話題について選択肢形式（p/a）で学生に回答してもらった。質問は、1.参加者自身（体調・趣味・心配事・最近の出来事）、2.人について（家族・友人・他参加者・学生・有名著名人）、3.園芸について（今日の活動の事【現在】・植物との思い出【過去】・今後やってみたいこと【未来】）、4.その他話題（季節・天気・料理・その他）とした。

＜結果および考察＞

1. 参加者全体と交わした話題について

はじめに 2015 年度下半期の活動プログラム内容について表 1. に示す。活動内容は、「花壇系」「クラフト系」「飲食系」に大別される。各回、リーダーとなった学生が植物の生育状況や季節

表1.　活動プログラム内容詳細

発話記録	実施日	プログラム内容		
		花壇系	クラフト系	飲食系
①	9月26日	ナス・しし唐収穫 土づくり・千日紅ワイヤリング 播種（大根・ビオラ） 苗定植（白菜）		白玉あずき
②	10月10日	収穫（マリーゴールド） 播種（ほうれん草・コカブ・ラディッシュ・青梗菜） 苗定植（アリッサム・ノースポール・撫子・イチゴ） 種採り（朝顔）		モロヘイヤ試食
③	10月31日	サツマイモ掘り・リース土台巻き 種採り（ゴマ・藍） 播種（スイートピー・スナップエンドウ） 苗定植（ビオラ・パンジー） チューリップ球根植付け		
④	11月14日	苗定植（葉ボタン）	マリーゴールド染め	蒸かし芋
⑤	11月28日	苗定植（ビオラ） 収穫（人参・ラディッシュ・コカブ）	クリスマスリース作り	
⑥	12月19日	収穫（人参・コカブ）	しめ縄作り	スイートポテト作り
⑦	1月9日	収穫（コカブ・大根・人参）	押し花カレンダー作り	七草粥
	2月13日	土の天地起こし		チョコレートフォンデュ
⑧	2月27日		おひなさまアレンジ	甘酒作り
	3月12日	土づくり（施肥）	押し花作り（ビオラ）	
	3月26日		レイズドベッドペンキ塗り	

行事などを考慮し、プログラムを 立案 、実施している。 発話は、全 11 回のうち 8 回分を記録した。まず、参加者全体と活動中交わした話題についてプログラムの系統で比較してみると、全体として大差はみられなかったものの、「花壇系」では参加者自身の体調や趣味・天気・植物に関する過去の思い出などが多くみられ、「飲食系」では料理や、日常会話が多くみられるなど、プログラムよる会話の違いがあることが示唆された。

2. 活動プログラムによる発話について

発話記録を取った全 8 回のプログラムにおいて、参加者の発話データ数は合計 707 であった。全発話をグラウンデッドセオリー法により分析し項目別に分類したものを表 2.に示す。さらに発話の多か ったものを抽出し、整理したものを表 3.に示す。

表2. 項目別発話数

		花壇系			クラフト系					飲食系					
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	①	②	④	⑥	⑦	⑧
	学生（人）	11	11	13	13	10	12	13	11	11	11	13	12	13	11
カテゴリー	項目　参加者（人）	5	7	3	3	3	3	3	3	5	7	3	3	3	3
意欲	飲食意欲										5				
意欲	活動意欲	4	5	2	9	1	7	2	1	1	1	2	3	5	
意欲	再現意欲			1	2			1					1		
意欲	作品の利用					5	1		3						
意欲	作品への意欲						1								
大学	学生への助言質問	5	8	6	7	10	2	1	1		4	5	2	7	1
大学	大学のこと					5	1				1				
過去	過去一般の想い出										1			1	
過去	植物に関連した想い出		8	2	2					1		1	2	2	
過去	昔の食事について									2					
活動	飲食の感想									3	12	7	3	3	9
活動	活動全体の感想					2									
活動	活動での発見	2				2		1		2					
活動	作業の確認		4	5	12	7		1	3					1	
活動	作業の感想		6	6	9			7	5	1		2	3	2	1
活動	作業への疑問質問	2						2	1						
活動	作品の感想					9	5	3	9					1	
期待	活動への期待		6	2	2						3				
期待	完成への期待				9		1								
自己	自己有用感		5	2	3		2	1						1	
自己	自分自身・家族のこと	7	15	15	9	20	4	10	6	2	10	10	2	9	2
自己	知識の共有	3		2	2		2							4	1
自己	調理過程の助言												6	2	
植物	植物への愛着		2	1						1					
植物	植物への関心・質問	7	20	12	10	10	6	4	3	4			1		
植物	植物への好感	5	7	4	1				1	1					
日常	季節のイベントの感想			6		2			1						2
日常	感謝			1		4									
日常	天候	3	5	12	2	5	3	1	1		1			1	
日常	日常会話	2	2	5	2	2	4		3	9	6	2	5	2	
満足	活動への満足感		6		2	2	1	4		1	4	1	1	2	
満足	作品への満足感					2				3					
	発話数計	40	99	84	83	88	40	38	38	31	48	30	29	43	16

すべてのプログラムで多かった発話項目として、「活動意欲」「活動への満足感」「学生への助言質問」「自分自身・家族のこと」「作業の感想」「日常会話」が挙げられた。なかでも「学生への助言質問」「自分自身・家族のこと」はどのプログラムにおいても特に多く、園芸活動に継続的参加することは、自己開示の場となっていることが考えられた。また学生の存在は、異世代間コミュニケーションの場としての会話を生み出していることが示唆された。

表３．発話分析まとめ

発話項目	時間軸	花壇系（3回）	クラフト系（5回）	飲食系（6回）
活動意欲	現在/未来	◎	◎	○
活動への満足感	現在	○	○	○
学生への助言質問	現在	◎	◎	◎
自分自身・家族の事	現在	◎	◎	◎
作業の感想	現在	◎	◎	○
日常会話	現在	○	○	◎
植物への愛着	現在/過去	○	×	△
植物への好感	現在/過去	○	△	△
再現意欲	未来	×	○	△
完成への期待	未来	×	○	×
作品の利用	未来	×	○	×
作品への意欲	未来	×	○	×
作品の感想	現在	×	◎	△
飲食の感想	現在	×	×	○
調理過程の助言	現在	×	×	○
作業の確認	現在	○	○	×
自己有用感	現在	○	○	△
植物への関心質問	現在	◎	◎	△
天候	現在	◎	○	△
作業に関連した想い出	過去	○	×	○

【発話数】◎=特に多い　○=多い　△=少ない　×=なし

次に、活動ごとによる発話の違いをみると、花壇系プログラムの発話では、「植物への愛着」「植物への好感」がみられ、実際に花壇において植物と触れ合うことにより生まれる会話があることを印象付けた。クラフト系プログラムの発話では、「再現意欲」「完成への期待」「作品の利用」「作品への意欲」「作品の感想」がみられ、参加者の意識として意欲や期待など未来に繋がる気持ちを生み出す会話がみられた。飲食系プログラムでの発話は、「調理過程の助言」がみられ、料理経験のある参加者から学生に助言する会話などを生み出した。

また、時間軸で発話をみると、花壇系および飲食系プログラムでは参加者から過去を回想させる発話を促し、クラフト系プログラムでは、参加者からその利用や完成の期待感を抱く発話を促した。

園芸療法活動は、花壇系プログラムで育てたものをクラフト系および飲食系プログラムで利用するという一連の流れがある。しかし、今回の発話データからは、学生と参加者との発話記録からは、花壇系プログラムにおいて、のちにクラフトや飲食に繋がる発話を引き出すことはなかった。参加者が花壇に植えた植物をのちにクラフトや飲食などで利用することをイメージ付けて活動参加することは、活動が単発的なものでなくよりストーリー性があ

り、参加者の意欲や楽しみを引き出す可能性があると思われる。今後は、クラフト系で得られた発話が、花壇系プログラムの際にも促されることが期待される。そのためには、実施者(今回は学生であったが)に対しても、園芸療法活動が、花壇系プログラムとクラフト・飲食活動が流れとして繋がっていること、またその流れが、参加者の意欲や期待、楽しみに繋がるように活動全体をリードしていくことの必要性を伝えていくことが重要であると考えられる。

注

1） 小澤　直子　恵泉女学園大学非常勤講師
2） 本田ともみ　東京家政学院大学非常勤講師
3） 伊勢田直子　千葉大学大学院園芸学研究科修了
作業療法士資格取得のため東京福祉専門学校在学中
4） 澤田みどり　恵泉女学園大学社会園芸学科特任准教授
5） 岩崎　　寛　千葉大学大学院園芸学研究科准教授

本稿は、人間・植物関係学会・日本園芸療法学会2016年度合同大会(2016年10月1～2日、兵庫県尼崎市ホテル「ホップイン」)にて口頭発表を行った際に提出した要旨である。

謝辞

掲載をお許しいただいた恵泉女学園大学園芸文化研究所長小林幹夫教授に、この場を借りて心より感謝申し上げます。